

## 事例2：制御ソフトの納品前の不具合について

B社でソフト開発グループのマネージャーを務めるAさんは、同社の大口顧客であるJ電力を主に担当している。もともと情報処理技術者として確かな腕を持ち、顧客から名指しで依頼がくるほど優秀なAさんだが、数名の部下を率いる身となった今では、管理業務に時間をとられているのが実情。現在手がけているJ電力の新しい発電所の制御ソフトも、実際の開発は部下に任せていた。

さて、J電力の発電所も完成に近づき、ソフト納入が目前に迫ったある日、Aさんは部下からの報告を受けた。

部下： 「実は、セキュリティ・ホールが残ってしまっています。いろいろとやってみたんですが、納入日までに解決するのは無理のようです」

Aさん： 「えっ、そんなバグを抱えていたのか。どうしてもっと早く言わなかったんだ」

部下： 「最初は、たいした問題ではないと思ったんです。それで、自分で解決しようといろいろな方法を試しているうちに、時間が経ってしまって。マネージャーはいつもお忙しそうだから、相談しづらくて・・・」

Aさん： 「遠慮している場合じゃない。とにかく調べてみよう」

Aさんは早速調査チームを作り、問題の深刻さや考える事態を整理した。その結果、次のような状況が明らかになった。

1. このセキュリティ・ホールを解決するには、まだかなりの日数を必要とする。

部下の言うとおりに、納入日までに修復するのは不可能だろう。だが、このようなセキュリティ・ホールがあるのは決して珍しいことではなく、他のソフトメーカーでも、バグを残したまま納品するケースはよくある。むしろ、問題が解決された時点でバージョンアップしていくやり方が一般的といえよう。

2. このセキュリティ・ホールが修復されないまま、なんらかの事象が起こってしまった場合、発電所所員が判断を誤れば、発電所に重大な影響が及ぼされ、発電所周辺にも環境影響があるかもしれない。

だがシミュレーションを行ってみると、このセキュリティ・ホールに影響されるような事象が起こる確率は非常に低いという結果が得られた。

また、発電所所員は定められた教育・訓練を積んでおり、そうそう判断を誤ったり、対処ミスを犯したりするとは思えない。

3. 予定通り納品しなければ、発電所の運転開始が遅れてしまう。

この場合、一発電所の問題だけでなく、電力供給そのものに大きな影響が出ると思われる。またB社の社内的なことと言えば、長年築き上げてきたJ電力の信用を失ってしまうことにもなりかねない。さらにAさんの個人的感情としては、J電力が抱いてくれている自分への好印象を損なってしまうようで、やりきれないものがある。

以上の点を比較検討したAさんは、セキュリティ・ホールを残したままソフトを納品することに決めた。